



「世界のSBI」に向けて 国際財務報告基準(IFRS)を早期適用

IFRSの適用初年度で感じた日本会計基準との差異について

取締役執行役員常務 森田 俊平

Q 国際財務報告基準(IFRS)を任意適用した背景と意義を教えてください。

SBIグループは「世界のSBI」を標榜し、海外進出を加速させる一方、2011年4月に香港証券取引所に上場しました。この上場を機にIFRSの早期適用を決定し、2013年3月期より任意適用しました。

IFRSの大きな特徴は財務報告の透明性の高さです。資産・負債が每期公正価値で評価され当社グループの財政状態にタイムリーに反映されるとともに、財務情報の国際的な比較可能性も高まりました。

Q IFRSを適用したことによる各事業分野での影響について教えてください。

最も影響が大きいのがアセットマネジメント事業です。日本会計基準では営業投資有価証券の売却時に原則としてその取得原価との差額を損益として認識していましたが、IFRSでは基本的に売却の有無に関わらず保有資産を四半期ごとに公正価値評価し、評価額の増減を収益認識しますので、マーケットの影響を受けて業績が大きく変動することになりました。このことは経営上の判断にも影響を与えています。取得価額に関係なく、前四半期末からの評価額の増減が損益となりますので、含み損益の額とは関係なく保有資産の価値が今後上がると判断すれば保有を継続、下がると判断すれば速やかに売却するというように、タイムリーかつ迅速に意思決定を行うことが求められるようになりました。

次に金融サービス事業においては、IFRSでは収益を期間按分して繰り延べる必要があったり、日本会計基準では認められるような費用の繰り延べが認められなかったりと、日本会計基準と比べて保守的な面が影響を及ぼします。さらに、IFRSの特徴である公正価値評価の影響として、金利・株価・為替などの変動が影響を与える資産・負債を保有している場合、その分マーケットの影響を受けます。

一方、バイオ関連事業とその他の事業については、日本会計基準との大きな差異はないと言えます。

なお、2013年3月期からIFRSの適用とともにセグメント区分の変更を行いました。金融サービス事業は過去から積み重ねてきた実績に基づき安定的に収益力を生み出し拡大していく事業分野、アセットマネジメント事業は、資産価値の変動がタイムリーに財務諸表に反映され、その分四半期ごとに収益が大きくぶれる事業分野、そしてバイオ関連事業はその高い将来性を確信し、当社グループが今後主力事業の一つに育て上げようと考えている事業分野であることが明確になったと思います。

Q IFRSでの財務諸表に関して、日本会計基準と比べて分かりにくい点がありますか？

IFRSでの損益計算書について理解していただきたい前提が2つあります。

1つ目はIFRSには経常損益や特別損益の概念がないことです。このため本業から得られる損益だけでなく、例えば子会社の売却を行った際の売却損益なども営業損益に反映されます。

2つ目はIFRSにおける「当期利益」の意味です。日本会計基準における「当期純利益」は少数株主損益控除後の利益ですが、IFRSでの「当期利益」には「非支配持分に帰属する当期利益」が含まれており、「親会社の所有者に帰属する当期利益」が日本会計基準での「当期純利益」に相当します。日本会計基準における「1株当たり当期純利益」もIFRSでは「基本的1株当たり当期利益(親会社の所有者に帰属)」という言葉に変わっています。この「親会社の所有者」という言葉が分かりにくいのですが、これは当社(SBIホールディングス)の株主様のことを指します。IFRSでは、親会社の株主も子会社の少数株主どちらも一つの企業グループの株主と捉えているため、両者を区別する上でこのような言葉遣いとなっているのです。